

## 色が変わったよ

大津町立陣内幼稚園（熊本県菊池郡）

[4歳児]

園庭のいろいろな花がたくさん咲き、それを花束にしたり保育室に飾ったりしている。そんな中、水を入れた袋に花びらを入れ、「きれいね」とつぶやく姿がある。時間が経ち、薄い紫色に染まった袋を見た子どもたちからは歓声が聞かれ、その日からクラスのみんなが、色水遊びを盛んに楽しむようになった。



### 事例：花の色の違いから、花の種類の違いへ

#### 「モミモミするといいよ」

色水遊びが毎日の楽しみの一つになり、子どもたちの中では、「モミモミするといいよ」「色が出たよ」の音があちこちから聞かれるようになった。サフィニアの花を摘んでは水に入れ、色が出てくるのが面白くて仕方がない様子であった。



#### 「色が変わらないよ」

ある日、A児が花びらを水に入れたのに水の色が変わらないので、「先生、色が変わらないよ」と不満気に訴えに来る。同じ花なのに友達の色水を見て「何故?」と不思議に思う子どもの姿がある。色が出ないことに気付いたA児は、薄桃色の花とは別の、紫色のサフィニアの花をビニール袋の水に入れる。「あっ、色が出た。紫色!」と、花の色によって色の出方が違うことに気付く。周りの友達に、このことを満足気に話す。



#### 「今度はこのお花」

「今度はこのお花」「私も」と、ポーチュラカの花びらで色水遊びをする。「えっ、出ないよ」と、水の色が変わらないことを不思議に思う。そこで保育者は「同じ紫ね。違う花でも色水を作ってみようか」と、いろいろな花で遊べるように促す。「これ出ないよ」「薄ーい」などと気付いたことを伝え合い、花の種類によって色の出方が違うことを体験する。この気付きから、野菜の葉や雑草を採ってきて試すようになる。



#### 「シャカシャカするといいよ」

朝顔の花が咲き、花をペットボトルに入れて「色は出るのかな?」と心配そうに見守る。鮮やかな赤や紫の色が出てくると、「あっ、出たよ」「きれいね」「いっぱいシャカシャカしたからだよ」と、喜んでやりとりをする。この後、色水遊びのことを「シャカシャカしよう」と言い、戸外で毎日遊ぶようになる。

#### 「ぼくのと違う色だ」

「私のが青いよ」「ぼくのと、違う色だ」と友達の色水と比べ合う姿が見られる。保育室に持ち寄った色水の入ったペットボトルを、友達のものとは比べて濃さを「青い」と表現し、気付いた違いを伝える。そこでペットボトルを薄桃色から順番に並べる。色の違いがわかり、その違いに不思議さを感じる。



<その後>

水を少量にしたり、花の量を多くしたり少なくしたりして、色水の色の違いに興味をもって遊びを楽しむ。

### みどころ

「花びらを水に入れると、花の色に染まり色水になる」ことを不思議に思うことなく、園庭の草花で色水遊びを楽しむ子どもたちの姿はよく見られます。しかし、この事例の子どもたちは繰り返し遊ぶ中で、様々なことを感じ取り気付いています。そのためには事例にあるように、声に出したり注目したり試したりしている姿を見逃さず、子どもに寄り添い丁寧に見取って援助する保育者の役割が重要です。不思議さや疑問を感じた子どもたちは探求心が引き出され、様々な気付きをしながら遊びが展開し「科学する心」が育まれています。